

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 3 日現在

機関番号：33804
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26463263
 研究課題名(和文) 外国人模擬患者を活用した「英語を使って看護ができる看護師」養成プログラムの開発

 研究課題名(英文) Fostering Globally-minded Nurses through Sessions with English-speaking Simulated Patients for Student Nurses

 研究代表者
 平野 美津子 (HIRANO, Mitsuko)

 聖隷クリストファー大学・リハビリテーション学部・教授

 研究者番号：80123321
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：外国人患者が益々増える中、看護師が患者と英語でコミュニケーション取るのはむづかしい課題である。つたない英語でも、できるだけ早期に外国人患者とふれあい、英語で会話をすることが不安を解消する大きな手立てである。英語を話す外国人模擬患者を使った授業を展開することで看護学生の言語と文化の壁を打ち砕くことができる。実際にセッションを行うと、看護学生たちは緊張が強く、専門職者としての技術がおざなりになり、英語で外国人患者のケアをすることに自信を無くす。外国人模擬患者とのセッションを繰り返すことで学生は言語の壁を破って英語で外国人患者のケアをすることに自信が持てるようになる。

研究成果の概要(英文)：We predict there will be more foreign patients hospitalized in Japan. As you can easily imagine, speaking to foreign patients in English is too big a challenge for nurses in Japan. We are sure that early exposure to foreign patients should ease the anxiety of caring for them even in their limited English. Implementing the use of English-speaking simulated patients (SPs) to educate non-English-speaking student nurses is a good way to help nurses break through language barriers and cultural differences. We found that student nurses lack confidence in caring for foreign patients in English and tend to forget about the professional skills. Repeating sessions with English-speaking SPs will educate non-English-speaking nurses to be confident in caring for foreign patients in English by breaking through the language barrier.

研究分野：英語教育

キーワード：外国人模擬患者 看護コミュニケーション 模擬患者セッション 外国人へのケア シナリオ

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の医療機関を利用する外国人患者は年々増える傾向にあり、医師ばかりでなく、患者に最も身近に接する看護師の英語コミュニケーション能力向上は急務である。

(2) 医学部や歯学部では、外国人患者を英語で診察できる能力を身につけさせるために、学生の客観的臨床能力試験 (OSCE 試験) に外国人模擬患者 (外国人 SP) を利用する試みも見られるようになった。一方、看護師の教育現場では、外国人患者を想定した英語教育は、もっぱら英語教員だけが受け持ち、テキストを使った語彙や表現の暗記、ロールプレイによって定型の英語表現を習得させることに重点が置かれているのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では、外国人患者に対して「英語を使って看護ができる看護師」養成のために、看護学生の授業において、外国人 SP を組み入れた授業を作り出すための方略を考える。

(1) 日本人模擬患者のリクルートと違い、外国人、特に英語を話す外国人 SP のリクルートには困難が伴う。外国人 SP のリクルート方法を考えていく。

(2) 看護教員と連携し、看護師に必要な情報が得られるような良質の英文シナリオを作成し、授業の中でどのように模擬セッションを実施できるか考え、外国人 SP セッションを実施する。そして、模擬セッションについての学生の反応を評価する。

3. 研究の方法

(1) 外国人 SP への広報と説明会の資料を整え、実際にリクルートしての手ごたえを評価する。また、SP 利用教育で先進的な海外の大学での研修を行い、SP リクルート方法、SP 養成の現状、問題点などについて資料を集める。

(2) 臨床現場の視点、学生の看護学習の視点

に即したシナリオ作りを行い、外国人 SP セッションを授業の中で実際に利用し、学生の反応、意見、および SP の感想などを聞き、その効果、問題点を検証していく。外国人 SP セッションを行う対象は1年時に看護介入 SP セッションに参加したことがある看護学部2年生。外国人 SP とのセッション直後に学生から自己評価を、外国人 SP からは他者評価を得る。評価はコミュニケーションに関する10項目、および、セッション体験の感想を聞いた。なお、当研究は研究者所属施設の倫理委員会の承認 (認証番号: 13061、13062) を得て実施された。対象者に研究趣旨、参加の自由、不参加でも成績には影響しないことなどを説明し同意を得て行った。

4. 研究成果

(1) カリフォルニア州オークランドにあるサミュエルメリット大学に視察に行きシミュレーション教育について学んできた。当大学は、看護師、作業療法士、理学療法士、医療助手、足病療法士などを養成する学部を持つ医療系の大学である。すべての学部授業において、High-Fidelity Manikin-Based Simulator をはじめ、中程度のマネキン・シミュレーターを使用、あるいは SP セッションを行っている。

SP セッションは、10 部屋ほど用意された個室で行われ、各部屋にはカメラが5台ほど設置され、学生と SP とのやり取りは逐一撮影され、問題点などは後に行われる Debriefing にすぐに使うことができる。

SP は、費用を払って雇用し、有償で訓練をしていた。セッション前は、できるだけ学生が SP と顔を合わせることがないようにして、実践に近い演習を行っていた。ここでの教育は「SP は、大切な教師である」という認識の基に行われていた。さらに、SP との契約、研究同意書などをしっかり整えることを学ぶことができた。

これらのことから、本研究における外国人 SP セッションでは、学生と SP が実践に近い形で面談できるように個室に近い環境作りを工夫した。



(2) シナリオは、5分程度で終わるような内容を作り、その全てのシナリオをアニメーション化し、授業での解説の手間が省けるように工夫をした。

(3) 外国人 SP 参加型演習を体験した看護学生の自由感想をテキストマイニング分析し、体験の内容を明らかにした結果、次のことが分かった。

言葉ネットワーク図(係り元・係り受け関係)によって以下の8つの話題が抽出された。

- ・ [英文のシナリオは覚えた]
- ・ [人を相手に練習した]
- ・ [本番は緊張で頭から飛んだ]
- ・ [言葉が出てこなかった]
- ・ [理解できず返答に困る]
- ・ [大きな声を出す]
- ・ [練習の成果がでなかった]
- ・ [緊張しないができる]

外国人 SP 参加型演習に臨む学生の態度は、事前にシナリオを何度も読む、英文を覚える、学生同士で練習する等、主体的であった。一方、学生の感想からは、本番で外国人 SP を目前にすると緊張で言葉が出てこない、声が小さくなった等、授業で学習した英単語や看護コミュニケーション技術を生かせなかったという否定的な記述が目立った。当研究で、学生が英語による看護コミュニケーション

を体験できたのは1人5分の1回のみである。学生に既習の看護英語や看護コミュニケーション技術の活用を促すためには、演習の体験数を増やす必要があると感じた。1回だけの演習では、英語による看護コミュニケーションが否定的体験で終わる可能性が示唆された。翌年のセッションは2回に増やし、学生の成功体験は着実に増えた。

(4) 外国人 SP とのセッション直後にコミュニケーションに関する10項目について、学生からは自己評価を、外国人 SP からは他者評価を得た。各項目をマンホイットニーのU検定で比較($P < .05$)した。[共感の態度][患者が理解できる英語][患者を安心させる][専門職としての態度]は学生の自己評価が有意に低かった。これらは、共感や理解、安心させるといった、英語によるコミュニケーション力が求められる項目である。日本人の英語に対する「言葉の壁」のため、自己評価が低くなったと考える。外国人患者と同じ言語を医療者が使用することで患者満足度が上がると報告されているように(Freemanら、2002)、学生にとっては不十分な英語でのコミュニケーションであっても、外国人 SP の評価が高い結果となったと考える。看護学生の授業の中に外国人 SP を導入した授業を引き続き行うことによって、外国人患者へのケアを、自信を持って行うことができる看護職者を少しでも増やしていくことができるようになると期待する。

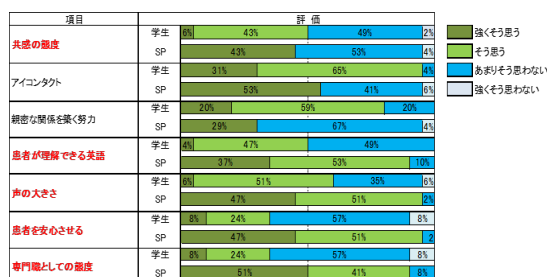
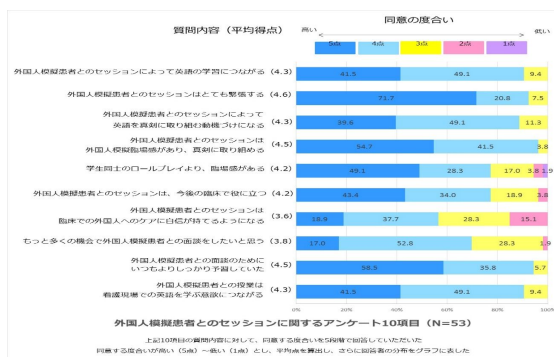


図1. 学生の自己評価とSPの評価

(5) 外国人 SP セッション終了後外国人 SP セッションに関する感想を聞いた。もっと多

く、この機会でも今後もセッションを実施したいと思うグループとそう思わないグループに分け、各項目間の関連をウィルコクソンの符号付順位和検定で比較 (P<.05) した。

もっと多く外国人 SP 参加型演習を実施したいと感じている学生は、事前にシナリオを何度も読む、学生同士で練習する等、意欲的に臨み、学生間のロールプレイよりも緊張感はあるが、臨場感があり真剣に取り組むことができていた。外国人 SP 参加型演習は、臨場感はあるが、緊張感も強く、一部の学生には自信につながる体験にならなかった。しかし、結果的に、動機づけに繋がったとポジティブに答えた学生は、全体の 96.2%、学生同士のロールプレイより臨場感があり、真剣に取り組めると答えた学生は 77.4%、将来の臨床の役に立つと答えた学生は同数の 77.4% に及んだ。

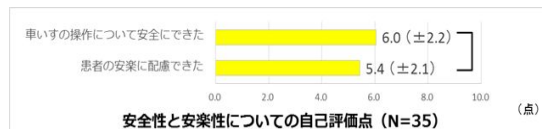


(6) 外国人患者の入院時に、受付から病室へ車イスで移送する場面を設定した外国人 SP セッションを実施し、演習直後に、車イス操作に関する 7 項目ができたかを尋ね、安全性と安楽性については VAS スケールを用いて調べた。

次の項目について「はい」と回答した学生は、以下の通りである。



安全性の評価の平均点は 6.0 点 (±2.2)、安楽性では 5.4 点 (±2.1)、安楽性についての評価が有意に低かった (P=.009)。



安全性より安楽性の自己評価が有意に低かったのは、英語を用いて看護ケアを実践する際に、英語を話すことに気をとられてしまい、安楽に配慮できなかった可能性がある。ブレーキング、フットレストの上げ下げは基本的技術であるが、全てできたと回答した学生は 9 名 (25.7%) にとどまり、安全についても配慮ができていない現状があった。外国人模擬患者を用いた看護教育を積極的に、繰り返し取り入れることで、英語での対応中でも看護技術が安全安楽に提供できるようになると期待する。

引用文献

Freeman GK, Rai H et al. Non-English speakers consulting with the GP in their own language: a cross sectional survey. *Brit J Gen Pract.* 2002;52:36-38

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 7 件)

平野美津子、篠崎恵美子、小野五月、外国人模擬患者参加型演習における看護学生の自己評価と他者評価の比較、第 19 回日本看護研究学会東海地方会学術集会、2015 年 2 月 14 日、浜松アクトタワー (静岡県浜松市)

小野五月、平野美津子、篠崎恵美子、看護学生の外国人模擬患者参加型演習の体験における感想のテキストマイニング分析、第 19 回日本看護研究学会東海

地方会学術集会, 2015年2月14日、浜松アクトタワー (静岡県浜松市)

Mitsuko Hirano, Christine Kuramoto, Emiko Shinozaki, Ruri Ashida, and Satsuki Ono, Fostering Globally-minded Nurses through Sessions with English-speaking Simulated Patients for Non-English-speaking Student Nurses, ASPE (Association of Standardized Patient Educators) 14th Annual Conference, 2015年6月15日, Denver Marriott City Center (Denver, Colorado, USA)

Mitsuko Hirano, Christine Kuramoto, Emiko Shinozaki, Ruri Ashida, and Satsuki Ono, Nursing Communication Sessions with English-speaking Simulated Patients for Japanese Student Nurses, 第18回 JASMEE (日本医学英語教育学会)学術集会, 2015年7月19日, 岡山コンベンションセンター (岡山県岡山市)

篠崎恵美子、平野美津子、小野五月、看護学生による英語を使った外国人模擬患者参加型授業の振り返り、第41回日本看護研究学会学術集会、2015年8月22日、広島国際会議場 (広島県広島市)

篠崎恵美子、平野美津子、小野五月、栗田愛、大林実菜、藤井徹也、外国人模擬患者参加型演習における看護ケアの実際、第35回日本看護科学学会学術集会、2015年12月6日、広島国際会議場 (広島県広島市)

Mitsuko Hirano, Emiko Shinozaki, Satsuki Ono, Christine Kuramoto, and Ai Kurita, Providing safe and comfortable care to foreign patients in English, 2016 ASPE Asia-Pacific Conference, 2016年11月20日, The National University of Singapore (Singapore)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平野 美津子 (HIRANO, Mitsuko)
聖隷クリストファー大学・リハビリテーション学部・教授
研究者番号: 80123321

(2) 研究分担者

芦田 ルリ (ASHIDA, Ruri)
慈恵会医科大学・国際交流センター・教授
研究者番号: 10573199

倉本 クリスティーン (KURAMOTO, Christine)
浜松医科大学・医学部・准教授
研究者番号: 20510126

篠崎 恵美子 (SHINOZAKI, Emiko)
人間環境大学・看護学部・教授
研究者番号: 50434577

小野 さつき (ONO, Satsuki)
聖隷クリストファー大学・看護学部・臨床准教授
研究者番号: 90288407

(3) 連携研究者

藤井 徹也 (FUJII, Tetsuya)
聖隷クリストファー大学・看護学部・教授
研究者番号: 50275153